

校長だより

和歌山市立八幡台小学校

2021.06. 8

NO, 1 7

～～～ことば～～～

今回は、ある先生の発行しているお便りからの抜粋です。個人的にすごく感じ入ったので、紹介したいと思いました。

「作家の出久根達郎さんが、エッセイの中で、言葉の力についてこんな風につぶやかれていました。『漱石の「草枕」の有名な文句ではないが、「とにかく人の世は住みにくい。」漱石はこう続ける。「住みにくさが高じると、安いところへ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれ、画ができる。」・・・いやな時代だから、私たちは時代に負けてはならない。無表情や、陰険な顔つきで生きてはならない。トゲのある言葉を遣ってはならない。時代に負けている証拠だ。・・・現代の流行語の「癒し」を、百年も前にすでに漱石が、今と同じ意味で用いている。癒すが美しい言葉かどうかはともかく、本物の言葉の力は時代に古びない。』

（『まかふしぎ・猫の犬』河出書房新社）

美しくやわらかな言葉を大切にして日々を生きるということは、時代に負けず、古びず、自分らしくあるということなのだと、改めて感じました。

「ことばは、こころとひとつなのです」

ハワイのことわざにて、「やさしい雨がレフアの花を開かせる。」意味は、「真にやさしい言葉が人を動かす。」だそうです。やさしそうに聞こえて、実は圧のある言葉、丁寧に気遣っているようなのにどこか冷たい言葉・・・そういう言葉では、人の心は動かないことを教えているのです。アロハスピリットは、互いの民族を尊重し、調和を重ねる、やさしさが心の真ん中にあるということのこと。相手への共感からやさしい言葉は生まれるのですね。

どちらの文章も、何度も読み返して考えました。私は、大切にしてほしい3つのもの、ということをよく言いますが、「自分」「なかま」どちらも大切にしようとするならば、言葉の持つ意味は大きいなと思いました。言葉が関係性を壊してしまったり、自分を傷つけてしまうこともあります。言葉を大切にして「自分らしく」あってほしいと願うし、共感の心を大切にして「なかま」にやさしい言葉をかけてほしい。「ことば」を大切にすることは、「自分」も「なかま」も大切にすることにつながる。この文章を湯んでいて、そう感じました。